

第5部会

という事態が前二世紀末から前一世紀前半にかけて起こっていることは興味深い。これは丁度その頃にローマがギリシアをはじめとする地中海の諸民族と接して交流が始まってから一世紀が経った頃であり、間接的に他者との交流、特にギリシア哲学との交流がラテン語の語彙に大きな影響を及ぼしたと考えられるからである。

一方この *religio* と *superstitio* という二つの単語の間の関係も時代によって三段階の変遷があったことをグロズニンスキーが指摘している。グロズニンスキーによれば、キケロの時代（紀元前一世紀）には「適切な時期に適切な場所で適切な方法で神々の礼拝を行う *religio*」対「不適切な時期や不適切な場所において不適切な方法で勝手に神々の礼拝を行う *superstitio*」という対照であったが、小セネカの時代（紀元一世紀）には「われわれローマ人の正統な *religio*」対「彼ら野蛮人の正統ならざる *superstitio*」となり、ラテン教父の時代（紀元三世紀）には「真の *religio* 即ちキリスト教」対「偽の *superstitio* 即ち異教」という構造に変遷を重ねたという。それゆえ、この教父の時代に至って初めて、「キリスト教という *religio* 対異教という *superstitio*」という現代の *religion* の用法に近い対立項が出現した、と言えよう。

以上のように、*religion* の語源としての *religio* を考える際には、*religio* 自体にも変遷があり、元来の *religio* は *religion* から程遠い意味のものであったこと、それが後に時代と共に意味の変遷を経た結果、*religion* の用法に繋がったという点は、特記すべきである。

パウロの宗教的自覚について

南 部 千 代 里

ダマスコでキリストに会って救いを体験し、キリスト教迫害者から被迫害者となったパウロの宗教を形成するものは、いわゆるパスカルの「アブラハム・イサク・ヤコブの神」（『覚え書』）であり、キリストによって受継がれた「救いの神」である。

だが、宗教を必要としない人は、パウロの神は、一人の寡婦の魂を救うことができたかも知れないが何千万もの人間同士の殺し合いを食止めることができない、下らないものであるというであろう。このような考えに対してキルケゴールは、「信仰とは、すなわち、個別者が普遍的なものよりも高くにあるという逆説である」（『怖れとおのき』）と、道徳の反省が深く進むことによって宗教へと導かれると語る。道徳は、現実の世間が不義非道であるが故に、神の超越性と全能と悪徳の間にジレンマを生じさせる。この板ばさみを通して、もし人間の根底に虚無を発見するならば、道徳は崩壊し宗教への転換を形作る。つまり、人間が宗教を求める動機は、死の開示と罪の自覚であって、不道徳即罪ではないのである。人間は、自己の死を経験できないが故に他者の死を通して自己の死を自覚し、罪も生まれるながらして自覚を持たないが故に純粹無垢なものから教えられる、つまり清きものに接して道徳的責任を感じる時、罪を自

覚するのである。このように他者を通して自己を知る、その時、神が「絶対他者」として私たちの存在の究極の根拠となるのである。

パウロは、私たちに「怖れおののいて、己が救いを全うせよ」(ピリピ)と命ずる。「怖れおののく」とは、絶対的存在である神と偶有的存在である私との無限の隔たり、絶望的深淵を意味する。絶対永遠の無限の神に対して時間的有限である私は無に等しいことを自覚する。絶望的立場にある私の救いをパウロは、此岸と彼岸を連続と非連続の關係と見なし、人間を種子と植物の比喩に譬えて説いた。地上の生は死後の生を準備する為のものとし、「この世を去ってキリストと共にいる」ことを人生の目標とした。従ってパウロの救済は、永遠は時間と矛盾対立するのではなく時間が永遠の中に包摂される、私が「キリストと共に死んだなら」キリストの計らいにより私は創造の中に没入される。それは永遠と時間、無限と有限、全体と無の矛盾が逆に一致することを意味する。即ち、死んでのみ神に接するとパウロは言いたのであるが、「今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔を合わせて、見るであろう」と譬で語るのである。

パウロは、「わたしの知るところは、今は一部分にすぎない」(第一コリント)と言う。つまり、救われる者にとって救う者の「義」は不可思議なのだと言うのである。よって人間に出来ることは、死後「またキリストと共に生きることを信じる」とパウロが言った如く、未だ見ぬものを確信する心、即ち宗教心を持つことしか為しえないのである。だがもし信に徹しよう

と努める「私」が心底にいるとしたならば、真の宗教心を体得したとは言えない。信に徹する努力の意思をも否定するのは、キリストが「幼な子のようにならなければ、天国には入れないであろう」(マタイ・ルカ)と語った故である。自己意識が未だ形成されない嬰兒の如く、自己が自己を忘れた、パウロの「われ、最早われにあらざ」(ガラテヤ)という境地が清き実を結ぶのである。従って、回心の経験に自己矛盾の反省を超えて自己に死する自己の目覚めである宗教的自覚が、私たち実存において重要課題となると言えよう。

創世記一章一節は、その一章の表題か

野口 誠

「はじめに神は天と地とを創造した」(創世記一・一)。この書き出しについて二つの見方がある。(a)一節は、一章の表題、または二―三一節に描写されている出来事の総括である。(b)一節は総括ではなく、表題をも兼ねる神の創造行為の最初の段階である。

(a)の問題点は、一章一節が次の二―三一節の総括または要約とされるが、そもそも総括とされる一章一節の内容のほとんどが、総括されたはずの二―三一節の中に見出されないことである。それゆえ筆者は(b)を正しいとみる。そのことを次に論証する。